

機関番号：13601

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2007～2010

課題番号：19520389

研究課題名(和文) 日本語的発想と表現との関係に関する対照談話論的研究

研究課題名(英文) Research on Japanese cultural attitudes and language expression viewed through the contrastive discourse theory

研究代表者

沖 裕子 (OKI HIROKO)

信州大学・人文学部・教授

研究者番号：30214034

研究成果の概要(和文)：

談話は複数の層からなっており、現実世界の出来事(＝事態)を、どのようにとらえ(＝場面意識)、内容をどのように組み立て(＝構造)、どのように言語記号化するか(＝表現)という各層それぞれに、各言語の発想法が認められることを明らかにした。たとえば依頼談話は、中国語、韓国語では要求的発想をとり、構造、表現ともに直接的であるが、日本語では懇願的発想にたち、構造、表現ともに間接的である。本研究では、対照談話論的にみた日本語談話の発想的特徴と、日本語内の談話的方言差について、理論と実証の両面から論じた。

研究成果の概要(英文)：

According to the synchronous grouping model, a discourse unit has four distinct layers: an actuality; an attitude; a macrostructure and an expression. The articulation of each of these layers differs in Chinese, Korean and Japanese. For example, in Chinese and Korean request speech, the speaker's attitude is close to that of making a claim on the listener and the macrostructure and expression are more direct compared with those in Japanese. In Japanese request speech, the attitude resembles that of an appeal and the macrostructure and expression are less direct. Thus, in this research, Japanese speech style and modes of thinking are described both from a theoretical aspect and by referring to empirical data viewed through contrastive linguistics and contrastive dialectology.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	900,000	270,000	1,170,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：日本語学・日本語教育学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：談話、発想と表現、場面意識、談話構造、談話表現、依頼談話、母語干渉、方言談話

## 1. 研究開始当初の背景

日常的に使用されている表現の談話展開は、その文化が有している発想のしかたに支えられている。発想と表現との関係を追求する研究領域には、意味論、語用論、社会言語学があり、研究的な蓄積が重ねられてきている。しかしながら、先行研究では、談話展開や言語行動の言語面がどのようになっているかという点に関心をおいた研究が多く、なぜそうした談話展開となるのかについて、人々の意識や文化型の側面からも体系的に考察しようとする研究は少ない状況であると感じられた。さらに、変種ごとに談話展開の差異があることについては、研究がほとんどみられなかった。

また、外国語母語話者が日本語の自然な談話展開を身につけようとするとき困難が生じることについて、すでに指摘がなされていたが、有効な日本語教育方法はまだ開発の途上であった。こうした場合、個人的な指導経験のうえからは、談話展開の言語面について指導するよりも、日本語的発想のしかたを指導するほうが効果的であることを感じていた。

以上をふまえて、日本語談話の発想と表現との関係について、談話論の理論的枠組みを構築しつつ体系的に記述し、日本語学習者がコミュニケーションの上で人格的誤解を受けることがないように、談話接触上の諸問題の解決にもつながるような基礎研究を行うことをめざした。

## 2. 研究の目的

申請当初の目的は、日本語的発想と表現との関係について、対照談話論的に考察分析することにあつた。具体的には、以下を研究目的とした。

- (1) 現代日本語における発想と表現の関係を記述整理する。
  - ① 日本語日常談話のテキストの種類を整理する。
  - ② 談話の連鎖にみられる表現の談話型を明らかにする。
  - ③ 談話表現を選択する際の発想を、話者の「認識型」として同時に記述対照にする。待遇関係についても変数として考慮する。
  - ④ ①から③の記述を、体系的に整える。
- (2) 談話型と認識型を考慮した日常談話の収集文字化を行い、談話データベースの雛型を作る。
- (3) 談話型と認識型およびそれらの関係について、変種ごとの差異を明らかにする。

- (4) 上記の記述にもとづいて、日本語談話論の理論的整備を行う。

## 3. 研究の方法

本研究が、最終的に採用した研究の方法は、次の通りである。

- (1) 実例談話資料と内省談話資料の双方を活用する研究方法を新たに工夫した。
- (2) 対照談話論的方法を用いて進めた。
- (3) 採用した研究方法にもっとも適する共同研究体制で行った。

従来の談話研究においては、実例談話資料を用いることが中心であったが、本研究は、内省談話資料の長所を積極的に評価し、活用したところに独創性がある。

内省談話資料を用いた場合の長所は、話者の談話使用意識の内省的観察が可能になることである。これにより、談話型と認識型の考察が、無理なく行えるようになった。また、ありえる談話展開だけではなく、ありえない談話展開について言及が可能になり、この点にも長所が認められた。

他方、内省談話資料を用いることの短所は、個人差についての位置づけが難しい点にある。談話意識のどこまでが言語共同体におけるラングとして共有されているかについての検証が行われていないため、内省資料分析の一般化は慎重に進める必要がある。

この方法の長所を生かし、短所を補うために、本研究では、内省分析を行う共同研究者の選定に次のような工夫をした。

まず、研究1年目の研究体制を、研究代表者1名と、海外共同研究者2名によって整えた。また、2年目からは、ここにさらに日本人共同研究者1名を加えた。

韓国語を母語としつつ第2言語としての日本語変種を使用する研究者（＝韓国日本語人）と、中国語を母語としつつ第2言語としての日本語変種を使用する研究者（＝中国日本語人）と、日本語を母語とする研究者（＝日本語人）が、緊密な連携のもとに共同研究を進めた。韓国日本語人と中国日本語人と日本語人の言語差は大きいため、三者の内省を対照させたときに明らかになる日本語談話の性格をとりあげ、位置づけていった。この研究体制をとることによって、個人差の面よりは、並置させたときに着目される日本語談話の発想と表現の特徴をとりだすことができた。

なお、日本語内の方言差については、主として公開された資料を活用した。

また、作例談話資料に加えて、実例談話資料も並行して収集を続け、活用した。

#### 4. 研究成果

主たる成果は、以下の通りである。

(1) 談話論の観点から、談話単位の性質を、包括的にモデル化した。

次の A から D の 4 層が同時に結節しているという談話モデル(【図 1】)を仮説として立てることにより、説明が容易になった。

- A: 現実世界の出来事 (=事態)
- B: 事態のとらえかた (=場面意識)
- C: 表現内容の組み立て (=構造)
- D: 表現内容の言語記号化 (=表現)

そして、これら B,C,D の各層それぞれに、各言語の発想法が認められることを指摘した。

時間的展開⇒⇒⇒⇒

A	【事態】	
B	【場面意識】	
C	◀談話構造▶	
D	//談話表現//	

【図 1】談話の同時結節モデル(部分)

(2) 依頼談話と申出談話を中心に分析し、韓国語、中国語と対照させた時に見出せる日本語の談話種の弁別的特徴を、B,C,D の各レベルにおいて記述した。

依頼談話を例にとると、中国語、韓国語では要求的発話態度をとり(または要求的場面意識を有し)、構造、表現ともに直接的であるが、日本語では懇願的発話態度をとり(または懇願的場面意識を有し)、構造、表現ともに間接的であった。

談話種のありかたには、言語ごとに固有の発想的特徴があることを明らかにした。

(3) 談話展開には、方言差があることを明らかにした。

(4) 第 2 言語としての日本語変種には、母語の干渉が談話レベルにおいても見られることを明らかにした。

以上、本研究で得られた(1)から(4)の成果は、いずれも談話論における新しい知見であり、国内外の日本語談話研究に新たな研究方法の提示と成果を加えることができた。また、日本語教育学や接触言語問題の解決に資する福祉言語学においても新知見を示すことができた。

今後は、談話種の弁別的特徴の抽出をさらに進めるとともに、そうして得られた弁別的特徴が、現実の自然談話の分類に、どこまで、どのように有効かについて、検証考察を行

たい。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 9 件)

- ① 沖裕子・姜錫祐・趙華敏・西尾純二, 「日本語談話の発想と表現」, 社会言語科学, 第 3 巻第 2 号, 138-143, 2011, 査読有
- ② 沖裕子・趙華敏, 「発想と表現からみる日本依頼談話のしくみと指導」, 日語教育と日本語学研究(上海), 第 5 号, 182-186, 2010, 査読有
- ③ 沖裕子, 「日本語依頼談話の結節法」, 日本語学研究(韓国日本語学会, ソウル), 第 28 輯, 2010, 119-136, 2010, 査読有
- ④ 沖裕子・姜錫祐・趙華敏・西尾純二, 「日韓中の外言談話にみる発想と表現—日本語と日本語教育のための基礎的研究—」, 人文科学論集<文化コミュニケーション学科編>信州大学人文学部紀要, 第 44 巻, 1-25, 2010, 査読有  
<http://hdl.handle.net/10091/10056>
- ⑤ 沖裕子, 「発想と表現の地域差」, 月刊言語, 第 48 巻第 4 号, 16-23, 2010, 査読有
- ⑥ 姜錫祐, 「韓国語における敬語運用と変化の動向—圧尊法と呼称表現を中心に—」, 日本研究, 第 28 輯, 中央大学日本研究所(ソウル), 7-21, 2010, 査読有
- ⑦ 沖裕子, 「各地方言から見る「方言文法全国地図」中部(長野・山梨)方言」, 日本語学, 第 26 巻第 11 号, 180-181, 2007, 査読有
- ⑧ 沖裕子, 「談話論からみた方言と日本語教育」, 日本語教育, 第 134 号, 28-37, 2007, 査読有
- ⑨ 姜錫祐, 「韓国人と日本人のコミュニケーション行動に関する比較対照研究」日本語学研究(韓国日本語学会, ソウル), 第 19 輯, 13-28, 2007, 査読有

〔学会発表〕(計 8 件)

- ① 沖裕子・姜錫祐・趙華敏・西尾純二, 「日本語談話の発想と表現」, 第 26 回社会言語学会研究大会, 2010.9.5, 大阪
- ② 沖裕子, 「日本語依頼談話の結節法」, 韓国日本語学会, 2010.3.20, ソウル
- ③ 沖裕子・趙華敏, 「発想と表現からみる日本語依頼談話のしくみと指導」, 第 5 回中国日語教育研究国際シンポジウム, 2009.12.13, 上海
- ④ 姜錫祐, 「韓国語における敬語運用と変化の動向」, 第 23 回社会言語学会研究大会, 2009.3.28, 東京
- ⑤ 趙華敏, 「中日の事態把握の相違について

- て」, 台湾東呉大学, 2009. 3. 15, 台北
- ⑥ 趙華敏, 「中国語と日本語の「好まれる言い方」について」, 中国湖南大学日本語教育国際シンポジウム, 2008. 9. 19, 長沙
- ⑦ 沖裕子, 「同時結節という言語観」, 愛知教育大学国際教育学会, 2008. 2. 16, 刈谷
- ⑧ 沖裕子, 日本語談話論, 北京大学招待講座, 2007. 10. 9-17, 北京

〔図書〕(計9件)

- ① 中西彩乃・沖裕子, 私家版, 『大阪摂津方言若年層談話文字化資料 付CD-ROM: 一部音声資料・文字化全電子データ』, 2011, 89頁
- ② 西尾純二, 桂書房, 『世界の言語景観・日本の言語景観』, 2011, pp. 110-121
- ③ 沖裕子, ひつじ書房, 『方言の発見—知られざる地域差を知る—』, 2010, pp. 161-182
- ④ 西尾純二, ひつじ書房, 『方言の発見—知られざる地域差を知る—』, 2010, pp. 119-136
- ⑤ 趙華敏, 三元社, 『世界をつなぐことば』 2010, pp. 443-454
- ⑥ 趙華敏・楊華・彭広陸・村木新次郎編, 学苑出版社(北京), 『日本語と中国語とその体系と運用』, 2007, 253頁
- ⑦ 趙華敏, 学苑出版社(北京), 『日本語と中国語とその体系と運用』, 2007, pp. 237-250
- ⑧ 沖裕子, 桂書房, 『山口幸洋博士古希記念論文集 方言研究の前衛』, 2008, pp. 304-322
- ⑨ 沖裕子, ひつじ書房, 『「単位」としての文と発話』, 2008, pp. 45-69

〔その他〕

[http://www.shinshu-u.ac.jp/faculty/arts/prof/oki\\_1/](http://www.shinshu-u.ac.jp/faculty/arts/prof/oki_1/)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

沖 裕子 (OKI HIROKO)  
信州大学・人文学部・教授  
研究者番号: 30214034

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

姜 錫祐 (KANG SUK-WOO)  
韓国カトリック大学・日語日本文化学部・

教授

研究者番号: なし. 海外研究協力者

趙 華敏 (ZHAO HUA-MIN)

中国北京大学・外国語学院・教授  
研究者番号: なし. 海外研究協力者

西尾純二 (NISHIO JUNJI)

大阪府立大学・人間社会学部・准教授  
研究者番号: 60314340